

Title	魯迅の文芸観と運動としての文学、そして宣伝
Sub Title	Lu Xun's view on literature, literature as a movement, and propaganda
Author	長堀, 祐造(Nagahori, Yūzō)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.112, (2017. 6) ,p.109 (138)- 115 (132)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2016年度藝文学会シンポジウム「戦争と文学」 開催日: 2016年12月16日 (金) 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01120001-0109">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01120001-0109</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 魯迅の文芸観と運動としての文学、そして宣伝

長堀祐造

さて、今日、主催者から私に課されたテーマは、専門の中国近現代文学の領域から魯迅、国防文学論争、コミンテルンといったキーワードで戦争と文学というシンポジウムに相応しい話しをする、長めの三題漸ということです。本題に入る前に、まず、譚璐美さんのお話の補充をしておきます。譚さんの伯父様の話がでしたが、譚さんの大伯父にあたる方は実は、中国現代史、共産党史の上では非常に重要な人物で、譚平山（1886-1956）といいます。北京大学に学び五・四運動に参加し、広東で中国共産党の創立準備委員会に関わった、共産党の創立党員です。譚平山は、歴史のいたずら、いわばとぼっちりで1927年末に共産党から除名されてしまいますが、のちに中国国民党革命委員会を作り、中華人民共和国建国まで尽力し、新中国でも重要なポストにつきました。譚さんのお話は譚さんご自身が『中国共産党 葬られた歴史』（文春新書、2001年）という本に詳しく書かれていますので、ご興味のある方には是非ご覧ください。

さて、本題に入ります。ハンドアウトをご覧ください。

### 1. 文学と戦争

まず、文学と戦争ということについて、戦争を描いた作品ということだけでなく、別の角度からこの関係について、考えてみたいと思います。

周知のように、二十世紀の帝国主義間の近代戦争は総力戦という形態をとるようになりました。軍事力だけが戦争の勝敗を決定するのではなく、政治、経済、文化、宣伝など国家の総力を挙げて勝利に貢献することが必要だと考えられるよ

うになります。経済力や国民の政治的、思想的団結が重要となりました。そのためには国家総動員体制が不可欠となります。第一次世界大戦、とりわけ第二次世界大戦はこうした総力戦として戦われたことは周知のとおりです。このとき、文学も戦争に組み込まれていきます。国民の思想的団結、幻想の団結と言ってもいいかもしれませんが、そのためには国民国家の構成員たる国民のイデオロギー的統一が欠かせません。文学、芸術が不可避的に持つ、イデオロギー構成力、それにイメージ喚起力を、為政者は宣伝手段として見逃すはずがありません。

日本の戦時下を見ても、1938年の国家総動員法のもと、1940年には大政翼賛会が成立します。そして文芸界もこれに協力し、内閣情報局の勧告によって、戦争遂遂を目的として、1942年には日本文学報国会（1942-45）が誕生します。それまでの日本文芸家協会は文学報国会に引き継がれ、解散しました。日本文学報国会の会員は約4000名で、そこには小説、劇文学、評論、随筆、詩、短歌、俳句、国文学、外国文学の8部会ができます。文学報国会に参加しない文学者は、実質的に発表の機会を奪われましたから、著名な文学者はほぼみな参加した、あるいは参加を余儀なくされました。ちなみに日本のプロレタリア文学運動は1934年には崩壊、解散状態でした。治安維持法から総動員法まで十三年、政党、言論の弾圧が戦争への体制作りの露払いになっていったという流れがあります。

さて、戦時下の文学者たちは、戦意高揚作品を書いたり、また、従軍作家として戦地から報道、ルポルタージュを書いたりしたのは周知のとおりです。こうした現地の修羅場を踏んだ従軍作家たちが書いたものは、必ずしも戦意高揚作品にはならなかったことは、関根先生のお話にも出てくるかと思います。

ともあれ、文学あるいは、文学者を軍国日本は宣伝の道具として、動員、利用したわけです。

## 2. 中国の戦時「文学体制」

### 1) 左翼作家連盟の成立と行き詰まり

一方、日本に抗した中国でも文学者は、この抗日戦争に動員されていきます。日本とは異なり、文学者たちは積極的に侵略に抗して、抗日運動に関与していくという面が強い印象があります。しかし政治家・革命家たちから見れば、文学・

芸術は利用、動員対象であったことは変わりません。

ところで、中国ではこの文学者の戦争動員に関してはいささか日本とは異なる複雑な様相がありました。一つは左翼文壇でのことですが、1928年、革命文学論争という論争が起ります。若い左翼文学者と魯迅ら進歩派既成作家との間で革命における文学の機能、左翼文学者の役割などについての論争があり、若い左翼作家と既成作家との間の対立という形をとりました。そこに中国共産党が介入してうまく調停し、1930年、魯迅を常務委員に取り込む形で、左翼作家連盟が成立していました。これは、プロレタリア文学運動の統一組織ということになります。1931年9・18の満州事変以来、日本軍はあからさまな中国への軍事侵略を進めましたが、国民党は、安内攘外、つまり国内を平定してから外敵を打ち払う、さらにはっきり言えば、まずは共産党を鎮圧して消滅させてから、それから日本軍を追い出すという政策をとっていました。そのため、対日総力戦ではなく、共産党の弾圧の方に主眼を置くというあり様でした。そういう情況で、魯迅の弟子のような存在だった左翼作家連盟の若い党员作家たちが国民党に殺されるという事態も発生します。こうした国民党の弾圧や、折からの共産党の左傾路線（極左的な路線）の中で、左翼作家連盟の運動も、1933、34年ごろにはだんだん尻つぼみになって行きました。

## 2) コミンテルンの方針転換

このころ、コミンテルンは、社会民主主義勢力を主要な敵と見なし、主要な打撃はこの社民勢力に与えるべきだという方針、社会ファシズム論を採っていました。ナチス、ヒトラーはいずれ消える存在であり、主要な敵ではない、むしろ労働者階級内で資本と融和的な立場をとる、社民勢力こそ敵だということです。そうしてナチスを免罪しているうちに、ドイツではヒトラーがいよいよ政権の座につき、すぐさま共産党弾圧を始めたわけです。そこで、コミンテルンはやっと、社会ファシズム論を転換し、今度は逆に社民、ブルジョワ政党との統一戦線戦術を打ち出します。これが1935年のことです。

## 3) 左連の解散と国防文学論争

この方針転換の影響が中国共産党指導下の左連にも及びます。つまり、文化領域での左翼的な文化運動すら国民党との連合を目指す統一戦線政策には不都合だ

ということになります。1935年末には、コミンテルン駐在の中国共産党代表部のリーダー、スターリン直系の中共指導者で八・一宣言の起草者でもあった王明の意向で、左連は解散することになります。左翼だけではない、もっと幅広い統一戦線組織を作ろうというわけでした。

しかし、中国の左翼作家のシンボルの存在であった魯迅はこの一方的な政治主導の解散に大いに不満でした。また魯迅は国民党とそう簡単には和解できないと考えていたのです。それは一つには、魯迅の弟子筋の青年文学者を国民党は残虐な方法で殺していました。第一次国共合作時代には蒋介石は、共産党は機関車で国民党は列車だと持ち上げ、それで青年たちは共産党に入ったのに、クーデタで彼らを殺したのは、ペテンであり、軍閥以上に悪質だと魯迅は増田渉や円谷弘といった日本人に語っています。他方、再び蒋介石の国民党と統一戦線を組んだとしてもまた、蒋介石が裏切らないという保証はないと魯迅は考えたのでした。

そして、1936年夏に国防文学論争という論争が、共産党の文学官僚・周揚らと魯迅及び魯迅周辺の文学者の間で起りました。周揚らは、「国防文学」というスローガンで左連解散以後の新たな広範な文学領域の統一戦線を組織しようとしてきました。これに対し、魯迅、茅盾、馮雪峰、胡風らは「民族革命戦争の大衆文学」というスローガンを対置します。

組織的には周揚らは中国文芸家協会を設立、一方魯迅側は巴金をも含め、中国文芸工作者宣言を出して対抗しました。魯迅は「国防文学」というスローガンの没階級性、左翼側の主体性放棄を批判したわけですが、最終的には中共の介入もあって、双方の主張に矛盾はないとされ、論争は収束し、魯迅はほぼ同時に亡くなります。

その後、1936年12月の西安事変、1937年7月の盧溝橋事件での日中全面戦争の勃発を経て第二次国共合作が成立し、文芸界の抗日統一組織も1938年に中華全国文化界抗敵協会が成立して、抗日の文化活動が幅広く、行なわれました。

### 3. 宣伝戦における文学の役割

ところで、革命文学論争で戦争を決するのは結局、武力であり、革命文学なんて言たって革命とは関係ないと言っていた魯迅ですが、文学と宣伝との関係についてはどう考えていたのでしょうか？ 実は、魯迅は革命のためにスローガン

的に書いた詩や小説は無力だ、ロシア革命の経験から革命文学は革命に遅れてくるもので、厳しい革命の時代に文学や芸術は新しい成果を期待できないと言ったのでした。魯迅は1920年代後半、トロツキーの『文学と革命』によって、革命と文学の関係について、考察していましたが、いま申し上げた魯迅の言葉はほぼトロツキーの言葉と同じなのです。魯迅はトロツキーの『文学と革命』の一部を翻訳してあります。魯迅のこうした基本的考えは1927年の講演「革命時代の文学」に端的に見ることができますが、この講演では魯迅は文学と宣伝の問題にもいち早く気づいていたことがわかります。ハンドアウトをご覧ください。①の「革命時代の文学」です。

だが私はこのような〔革命を宣伝、鼓舞、扇動、促進、完成せんとする〕文章は無力だと思います。というのは、優れた芸術作品は古今、他人から命令を受けず、利害を顧みず、自ずと心中から流露したものと決まっているからです。もし予め題目が決まっていて、それに合わせて文章を作るというなら、八股文と全く同じで文学的価値は毫もなく、まして人を感動させ得るか否かなどということは問題にもなりません。（「革命時代の文学」1927。〔 〕内、…省略記号は長堀注、以下同）

魯迅はお題目、つまりスローガンが先にあってそのために書く文学は無力だといいます。これが魯迅の基本的考えです。しかし、同時に魯迅はすべての文芸が宣伝であるとも言っています。ハンドアウト②の「文芸と革命」をご覧ください。[アプトン・] シンクレアというのはアメリカの作家です。

わたしは文芸に天下をひっくり返すちからがあるとは信じていませんが、ほかのところでそれを生かそうとする人がいても、かまわないと思っています。たとえば「宣伝」がそうです。…シンクレアは、すべての文芸は宣伝だと言っています。…すべての文芸は、宣伝です。人に読ませるかぎりは。たとえ個人主義的な作品であっても、書いてしまえば、宣伝になりえます。…文芸を革命につかい、道具の一つにしてももちろんかまいません。

とはいっても、内容の充実と技巧の上達が第一で、看板をかかげることに熱中するのはよくないと思います。…すべての文芸が宣伝であるとしても、

すべての宣伝がみな文芸ではないのです。…革命が、スローガン、標語、布告、電報、教科書…のほか、文芸を必要とするのは、なによりそれが文芸だからです。（「文芸と革命」1928。この訳は学研版『魯迅全集』による）

しかし、ここでも魯迅は、最初から看板を掲げた宣伝のための文学は価値がない、と「革命時代の文学」と同じ発想、原理を放棄してはいません。「硬訳と文学の階級性」では、自由主義的文学者、梁実秋が、左翼文学者が文芸を闘争の武器、すなわち宣伝品とすることに反発するのを批判しています。左翼の文芸理論は「すべての文芸には宣伝のはたらきがあるといっているだけのことで、宣伝に類する文章でありさえすればそれが文学だ、などと誰も主張するものはいない」と左翼を弁護しています。

もう一つ、魯迅の芸術と宣伝に関する考えを伺えるのは、日本の映画批評家岩崎昶の「宣伝・煽動手段としての映画」です。魯迅はこの文章を日本語から中国語に翻訳し、「あとがき」でこの作品は裨益するところが大だと言っています。岩崎は映画は大衆に対する宣伝、煽動の絶好の武器だとし、「映画と宣伝」、「映画と戦争」「映画と愛国主義」などの章を展開しています。映画が支配階級によって戦争、愛国主義などの宣伝の手段となっていることを痛烈に批判しているのです。ハンドアウト③をご覧ください。

我々は、現在製作させているすべての映画について、その隠微な目的…を指摘することができる。それは、あるいは帝国主義戦争へむけての進軍ラッパであったり、あるいは愛国主義や君権主義の鼓吹であったり、あるいは宗教を利用した反動宣伝であったり、あるいは資産者社会の擁護、革命に対する抑圧、労使協調の提唱、小市民的社会的無関心への催眠薬などであったりする。——要するに、ひたすら資本主義的秩序の利益のために思想的仕掛けをしつらえることに心をくだしているのである。

一九二八年、モスクワで開かれた中央委員会の席上、映画にかんしては、「映画を労働者階級的手中におき、ソヴィエトの教化と文化の進歩の任務にかんして、大衆を指導し、教育し、組織する手段とする」

という決議がなされた。ソヴィエト映画の任務は、世界の映画市場において、資本主義的宣伝の澎湃たる波にこうして、×××××宣伝をすすめるこ

とである。

世界はいま、第二次世界大戦の準備としての、イデオロギー闘争の渦中にある。そして映画は、かの五十九億の観客とともに、この闘争のはかり皿に決定的な重量をくわえることができるのである。(同前)

共産党の宣伝において、映画はどう利用されているか、モスクワではどう利用しているか、魯迅は非常に素早くこれに反応していて、中国語に翻訳、出版しているのです。魯迅がなぜこれを訳したかは、おそらく、文学・芸術の創作者ではなく、享受者の側からの宣伝論として一定程度、共感するところがあったからと考えられます。魯迅は抗日戦線において、文学・芸術が宣伝作用を持つことを否定しません。また、一方、支配階級側が宣伝要素・宣伝意図を隠しながら、支配的イデオロギーを貫徹した映画、言い換えれば、戦争や愛国主義へ大衆を誘導する宣伝・煽動の手段としての映画の危険性に気づいていたということです。

戦争という非常時の中で、魯迅が自分自身の文学観を保持しながら、抗日戦線の中でどう振る舞ったのか、宣伝という角度からも分析できるということ、そして当時もっとも強力な宣伝道具であった映画を帝国主義、ソ連双方がどう利用しようとしたかについて少しばかり紹介致しました。

映画という点でつながったところで、関根先生にバトンを渡したいと思いません。